

## 書 評

イザベラ・バード著、金坂清則訳注  
『完訳 日本奥地紀行3 北海道・アイヌの世界』  
平凡社 2012年11月 366頁 3,100円＋税

このたび、イザベラ・バード著、金坂清則訳注『完訳 日本奥地紀行3 北海道・アイヌの世界』（東洋文庫828）平凡社、が出版された。一言でいえば、バードの観察力の緻密さ、金坂氏の執念の翻訳と解説に脱帽した作品であった。本書の目次を示すと、次のようである。

蝦夷「蝦夷に関する覚書」に続いて、第38報「伝道活動」、第39報「函館」、第40報「風景の変化」、第40報（続）「遭遇」、第41報「アイヌとその生活」、第41報（続）「アイヌのもてなし」、第42報「未開の人々の暮らし」、第42報（続）「衣類と習俗」、第42報（続々）「アイヌの信仰」、第43報「酔っ払いの現場」、第44報「火山探訪」、第44報（続）「雨の中の旅」、第45報「驚愕」、第45報（続）「ぼつんと達つ家」、第46報「失われた環」、第47報「日本の進歩」、第48報「挨拶状」、第49報「台風」、そして付録A：蝦夷〔北海道〕の平取と有珠で採録したアイヌの言葉、が付けられている。

既刊された金坂氏のバード翻訳本すべてにおいて、完訳をモットーに詳細な解説が付けられていることが特徴であるが、本書においては、さらに「アイヌ語」へのこだわりが強く出されている。ただバードの足跡を追いかけるだけではない。訪問先の住民の文化・言語まで徹底的に調査する。それが氏の提唱するツイン・タイム・トラベルの真意である。

さて、目次の項目で、章にあたる〇〇報が第38報から始まるのは、本書が『完訳 日本奥地紀行』の1－横浜、日光、会津、越後、2－新潟、山形、秋田、青森、に続く第3巻だからである。この書評を執筆中に完結編の第4巻（東京－関西－伊勢－日本の国政）が出版された。それは第50報から始まっている。

以下、目次順ではなく、バードの感性に注目しつつ、紀行文の記録方法を学ぶといった形で論評してみたい。

1878年（明治11）5月に横浜に上陸し、同年12月

に横浜から離日するまで丸7カ月の間日本に滞在し、そのうち8月13日から9月14日までの北海道滞在日記が本書に収められている。

北海道の紀行文なのに、アイヌの話なのに、世界各地の地名がでてくる。比較して北海道・アイヌを語らせる。世界を踏破したバードならではの筆力であろう。そんな個所を一部抜き書きしておく。

「蝦夷の漁業には素晴らしいものがあり、〔太平洋の〕対岸にあるオレゴン〔州〕沿岸部の漁業に匹敵するが、…（23頁）」、「彼らの征服者である日本人〔和人〕との関係は、アメリカ人に対するアメリカ・インディアンや、マライ人に対するジャクシ、シンハリ族に対するヴェッド族との関係と同じである（26、27頁）」、「肌の色はスペインや南イタリアの住民に類似し、表情や改まった時の物腰は、アジア的というよりもヨーロッパ的である（27、28頁）」、「日本の本州の人にとっての蝦夷は、英国人にとってのティペリアリ〔アイルランド南部中央の内陸県〕、スコットランド人にとってのバラ島、ニューヨーク人にとっての〔テキサスの片田舎〕…（47頁）」、「この威勢のいい男たちは若く、鬚も生やしていなかった。唇は厚く、口は大きかった。それで私は、彼らがどの民族よりもエスキモーに近いと感じた（59頁）」、「そこにはどこまで続いていくのかいまだわからない砂のく浜辺が、アウトター・ヘプリディーズ諸島のそのようにうねっていた（64頁）」。

本文206頁の中で、以上のような外国地名が出てくる文章が十数か所ある。バード自身それだけの地へ行ってないと記せないで、その行動力に驚くが、それ以上にごく自然に比較して物をみるという感性が彼女に備わっていることに感心すべきであろう。こうした比較地域論的記述がなされていることにより、読者は想像力を駆り立てられるし、出てきた地名の分だけ余分に旅をした気にさせられる。外国地名だけでない。バードが直前に旅した第一の島〔本州〕の話も多数出てくる。われわれも紀行文を書く際には是非学びたい記述法である。

ただ素晴らしき点を他の地域と比較して強調するだけならいいが、どちらかをけなして優劣を付けて記載されている場面も多い。観察対象の欠点をさげすむ言葉で素直に述べている点は、正直ではあるが、好感がもてるかという一概にそうとはいえない。バードをけなしては申しわけないと思うが、次に、そんなところを突いてみたい。

まずは風景描写をチェックしてみよう。これだけ感動されたらそこについてみたくなる。

「一言で言えば、本州では許されることがすべてできるのである。…太平洋に沿って続く苫小牧から襟裳岬への〔道で味わえる〕途絶えることのない波の音、噴火湾沿いの地域の荘厳な静けさ、さらには爽快で自由な蝦夷の暮らしー私が日本から持ち帰ったもののうち、蝦夷の思い出がある意味で最もすばらしいものになったのは、これらの魅力のおかげである(28頁)」、「また銀色にきらめく湖は、回りの自然に光彩を与えていた。芳香が立ちこめる中を、露がしたたる静寂〔な森〕を抜けて湖のほとりに下りていくと、そこに、〔本州のような〕騒々しい土色の集落ではなく、変わった造りの一軒家〔宿〕が美しい風景に包まれて在るのが見えた。何ともうれしかった(50頁)」、「しかし私はこの午後の旅を満喫した。〔日本の〕型にはまった文明の拘束と、日本〔本州〕の旅のいろんな束縛から解き放たれ、自然がいっぱいの荒野と自由な雰囲気味わえるのはありがたかった(60頁)」、「美しさの点ではすばらしい所だった。ここの河床から眺めた風景ほど美しい風景は日本では初めてだ(151頁)」。

こうして抜き書きを増やしていくと、北海道の自然美を称える際に、本州を引き合いに出し、本州よりもすばらしい、と比較地域論的述べていることがわかる。自然だけではない、アイヌ人に対してもその礼賛は止まらない。

「男たちが天性の親切なもてなしの心をもってきばきと動き回る様子には、強く魅せられるものがあつた(78頁)」、「日本人とは違い、集まってくることもなければじろじろ見ることもない(79頁)」、「総じて退歩を感じさせる日本人の外見に慣れた者〔バード〕の目にはアイヌは実にすばらしく映る(102頁)」のごとくである。ただ、ここでも日本人(本州人)が引き合いに出され、かわいそうなくらいこけ落とされている。

日本人がかわいそうなのは一步譲っていいとして、ならばアイヌ人に対して敬意を表すればいいのではないか、と思うのであるが、バードはアイヌ人を完全に見下している。一言でいえば「未開／未開人」なる発言が多すぎる。第42報ではその題目に「未開の人々の暮らし」とあるし、項目名に「未開の人々の暮らしの味気なさ」「矯正できない未開の人々」が出てくる。

一つ文章を拾い出すと「彼らは歴史書をもたず、その伝統には伝統の名に値するものなどはほとんどなく、祖先は犬だったと公言する。家にも身体にもいろんな虫がたかっている。また無知の極致に陥っており、文字をもたず、千以上の数も知らない。…その他わけのわからないものを崇拜している。文明化も矯正も不可解な未開の人々である(101頁)」とある。もっとも、それに続いて「しかし、それにもかかわらず魅力的で、いくつかの点で私のこころを惹きつける。その甘美な低音や、柔和な茶色の目の優しいまなざし、そして、この上なくすてきな柔和な微笑みは決して忘れたくない」とフォローしている。

けなしてほめる、というのがバードのスタイルなのかもしれないが、この文を読んだらアイヌの人々はいかなる思いにひたるのだろうか。

アイヌが日本文化を如何に吸収しているか、興味深い記載が随所にあった。

バードは8月23日に平取のアイヌの家で世話になって貴重な体験を楽しみつつ、宗教や慣習を聞き出せるだけ書き留めていった。衣食住についての記載は詳細で、採集したアイヌ語も豊富で、事典の役割さえ果たしている。それらの詳細については割愛するが、信仰に関して、私の知識不足かもしれないが、義経が出てきて驚いた。

「そのあと副酋長は口を開き、病人たちに親切にしてくださいましたので、これまで外国の人には一切見せてこなかった私たちの神社をお見せしますと言った。とはいえ、そうするのを大変恐れており、『見せてもらったことは絶対に言わないでください。そんなことをされたら酷い目にあわされます』と何度も何度も懇願した(97頁)」この文章からだけでも、バードがただもてなされているだけでなく、アイヌの病人たちにも手助けしてあげていることがわかるし、アイヌの人たちが和人をかなり恐れていることもわかる。

そんな状況で、バードは曲がりくねった道を上りつめたところの木造の社に案内された。そこに歴史上の英雄義経が祀られていた。説明を受けたバードは「義経が自分たちに親切だったということがかたり継がれてきたというだけの理由で、アイヌの人々の記憶の中に生き長らえてきたのには、なにかほろりとさせられるものがあった（98頁）」と記している。

どんな親切を義経はアイヌにしたのか、については説明されていないので、これは歴史的に明らかにせねばならないと思う。中世の時代にアイヌは和人を恐れていなかったからこそ和人の義経を迎え入れたはずである。和人侵略の歴史を勉強せねばならない。金坂氏の解説によると、「寛政11年（1799）に平取を通過した近藤重蔵が江戸の法橋善啓に義経像を彫らせ、ここハヨピラに社殿を造らせたという伝承（渡辺茂・河野本道編『平取町史』）」があるが、それにしてもなぜアイヌがその後義経を神として祀り続けたかは定かではない。

さて、この神、義経に対してのアイヌ、バード、伊藤（和人）の礼拝の対応が興味深い。アイヌは「彼らは綱を振ってそれに付いた鈴を三回鳴らし、三度頭を垂れ、六回神に。〈酒〉を捧げた。このような儀式抜きでは神に近づけないのである」、バードは「彼らは私に私たちの神に礼拝してくださいと言ったが、私は私自身の神、つまり天地の主しか礼拝できませんと言って、その申し出を断った。すると、礼をわきまえた人々だったから、それ以上は強要しなかった」、伊藤と言えば、「すでにいる八百万の神の一つ別の神が加わろうが、そうでなかろうが大したことはないの、その神を拝んだ。つまり、征服民族である自分と同じ民族〔日本民族〕の偉大な英雄の前に嬉々として、頭を垂れたのである（98頁）」。

この部分をノートしていて、私自身はまったく伊藤と同じ考えで同じ行為をしたであろう、と感じ入った。この1年を振り返ってみて、昨年（2012）3月と12月にバングラデシュでイスラム教のアッラーにお参りし、ヒンドゥー教の女神カーリー、ドゥルガに頭を下げ、8月にはブラハとウイーンの教会で礼拝し、今年に入って1月3日、4日に仏様に合掌し、5日には伊勢神宮に初詣している。どんな神にでも抵抗なく手を合わせてい

る。おそらく日本人なら誰でもそうであろう。日本人は無宗教者と言われる所以がそこにある。こうした日本人に対して西洋人バードの「天地の主にししか礼拝しない」という一徹さは、出自の環境の違いが大きいことを認識させられ、興味深い。

以上のように義経の箇所だけ抜きだすとアイヌは皆義経信仰をしているように思われるが、実際はそうではない。第42報「（続々）アイヌの信仰」を読むと、その冒頭に「アイヌの宗教観ほど漠としてとらえどころのないものはないように思われる。山の上には義経を祀る日本風の建築様式の神社があるものの、これを別とすれば、アイヌは〔和人のように〕寺社をもたないし、聖職者をもつことも、犠牲をささげることもなく、礼拝もしない（123頁）」とある。これがアイヌの信仰の基本のように思われる。

私は、バードが「未開/人」という言葉を乱発しすぎるので、如何なものか、といった目で読書している。第42報「未開の人々の暮らし」の冒頭でいきなり平取のアイヌを次のようにこき下ろしている。

「初めは未開の人々の暮らしに潜む味気なさが魅惑の陰に隠れていたが、その魅惑が時間の経過とともに失せていくと、動物のような生活に必要なもの以外はこれといったものない暮らしであることがわかった（100頁）」。

出だしで、こんなことを言われたらアイヌは気分を害するであろう。ところがバードはまだまだと、得意の比較論法で「他の多くの先住民の暮らしに比べればかなり高度でもっとよい」とフォローしている。ここで終わるのではなく、「キリストの教えに従わないわが国の大都市の多数の墮落した人間の暮らしよりもかなり高度でもっとよい」と言って墮落した文明人批判をしているところがアイロニカルで痛快である。

未開人だろうが文明人だろうが、バードの人間論、すなわち、「誠実で概して慎み深く、どこまでも人をもてなす心を有し、人に敬意を払い、老人に対して優しい」が人物評価の最上位にあり、その軸がぶれないから、どれだけけなそうともバードに親近感を覚えてしまう。

さて、さんざんけなした内陸アイヌの平取に別れを告げ、バードの旅は海岸部に出て函館へと進んでいく。その間、海辺のアイヌ集落佐瑠太（8/

27)、白老 (8/29)、幌別、旧室蘭 (9/1)、礼文華 (9/6) などへ立ち寄って行くが、バードは彼らにいかなる印象をもったのであろうか。そのあたりを抜き書きしてみよう。

「噴火湾のアイヌは〔平取アイヌのような〕内陸アイヌよりもずっと毛深い (172頁)」、〔彼らの家〔チセ〕を訪ねたが、いずれも小さく貧相で、どの点から見ても〔平取などの〕内陸アイヌの家に比べて見劣りした。女たちも背が低くてずんぐりし、顔もたいへん不細工だった (180, 182頁)〕のように、海辺のアイヌは内陸アイヌよりももっとひどく書かれていた。

では、開拓村の和人に対してはいかなる印象をもったのであろうか。まずは景観をほめる。「丹念な施肥と根気強い手仕事によって、砂質の荒野は二マイルにわたって園地にかわっていたのである。…鮮やかだった。完璧なるオアシスだった」。ところが人物評となると、「先住民〔アイヌ〕に比べると姿形が見苦しく表情にも力が感じられず、<体つき>も男女ともに弱々しい感じが強くした。蝦夷の日本人〔和人〕は本州の日本人とはまったく似ていなかった。…非恒常的で不安定な仕事を生業にしており、本州の農民とはたいへん違っていた。ひまな時間は「飲み屋」でぶらぶらしていることが多く、自分たちより下の民族〔アイヌ〕に向かっていばる習慣のせいで進歩もまったくない (163頁)」。

本書の副題に「アイヌの世界」と銘が打たれていても、それをひとまとめにして概説しているのではなく、アイヌ集落の中でも内陸アイヌと海岸部アイヌの違いを明確に描き出しているし、さらに和人との混住集落、和人の開拓村も引き合いに出し、アイヌ世界の多様性を語っている点はバードの比較地域論的思考の結晶ともいえよう。

この書物、不思議な魅力がある。読めば読むほど新たな視点で分析したくなる。アイヌの暮らしぶりを知見するのが主であるが、この道中でバードはどんな動物と如何に接し、観察し、描いたのであろうか、という目で見ると、それに応えてくれる十分な記述がある。植物に対してしかり、地形描写においても冴えていてノートをとりたくなる。

ここでは動物観察として、馬、熊についてひと

こと触れておこう。

動物については、記載回数でいったら馬が最も多く、熊がそれにつづく。馬はバードの交通手段として登場する。馬とバード、その絡みはなかなか興味深い。ここでは馬が残酷に調教されている場面を出して、馬をいとおしみたい。「蝦夷の馬のみじめな状況は蝦夷を旅する上で大きな支障になっている。馬は無茶苦茶な使われ方をしており、ひどい傷が体じゅうにある。腹帯をつけないままに粗末な荷鞍を担って速い「不規則走」をさせられるうえに、重い荷物が背中で揺れ動くせいでできる傷である。そのうえ、目や耳のあたりを重たい棒で情け容赦なく叩かれたりする。…調馬とはいっても、私が白老で見たように、一時間や二時間にもわたって残虐きわまりないやり方で馬が本来もっている元気を打ち砕くだけのものであり、馬は最後には口からも鼻からも血を吹き、噴き出した血と泡とで体がおおわれて倒れこんでしまう (172, 173頁)」。

熊について、「アイヌはその流儀に従って熊を崇拜し、その頭を集落に据えるのに、それを罾にかけ殺し、肉を食べ、毛皮は売ってしまう。…その最大の宗教上の祭りが熊祭〔熊送り、イヨマンテ〕である。…男への最高の賛辞は熊に譬えることである。…捕獲された子熊は、普通は酋長か副酋長の家に連れて行かれ、そこで1人の女性に乳を飲ませてもらい、子供たちと遊んで過ごし、大きくなり荒々しくなって家の中で飼えなくなると丈夫な檻に移される。…よく成長して強くなったのを見計らって熊送りが執り行われる。…一部の村〔コタン〕では、熊〔子熊〕を乳母として育ててきた女性が、その熊が男たちの手にかかって殺されていく間ずっと泣き叫び、殺された後でその男たちを木の枝で一人一人叩くという習慣がある (126 -128頁)」。崇拜されるには殺されねばならないのか？ 熊もかわいそうだ。乳母の気持ちがよくわかる。

この辺で筆をおこう。バードによって記されたアイヌの知られざる世界を、彼女の比較地域論的考察によって興味深く学ぶことが出来た。これも金坂氏の「旅した場所と時代を読む」といった信条のもとでの翻訳によるところが大きい。

(溝口常俊)